

3. 調査結果

(1) 伽藍配置

上人壇廃寺跡は、これまでの調査で、掘立柱建物跡 20 棟、柱列・柵列跡 10 基、区画溝などの溝跡 42 条、竪穴建物跡 7 軒、土坑 23 基をはじめ、築地遺構・暗渠遺構・幢幡遺構・井戸跡が各 1 基（条）確認されています。遺構の重複関係や出土した遺物などから、寺院の伽藍変遷は、創建以前、第Ⅰ期、第Ⅱ期、第Ⅱ期終末、第Ⅲ期、第Ⅳ期の大きく 6 時代に分けられます。

■創建以前

寺院の創建以前の段階で、7 世紀末～8 世紀初頭頃に位置付けられます。竪穴建物跡 SI01 や SI02、SI06 などから構成されます。いずれも寺域の外側に位置することから、創建に関わる竪穴建物と考えられます。

■第Ⅰ期

寺院創建期です。創建期直前には 2 号瓦窯で創建期に用いた瓦の焼成が行われています。この瓦類などの土器から 8 世紀前半頃の創建と位置付けています。

一辺約 80 m (250 尺) のほぼ方形を呈する区画溝を取り囲むように築地がめぐり、その中央部に金堂と考えられる基壇建物跡 SB05 と講堂と考えられる掘込地業建物跡 SB06、南門跡 SB01 の八脚門が一行に並ぶ伽藍配置となります。また、築地に取り付く東門跡 SB001 などこの時期に作られています。



第Ⅰ期(創建期)

0 50m

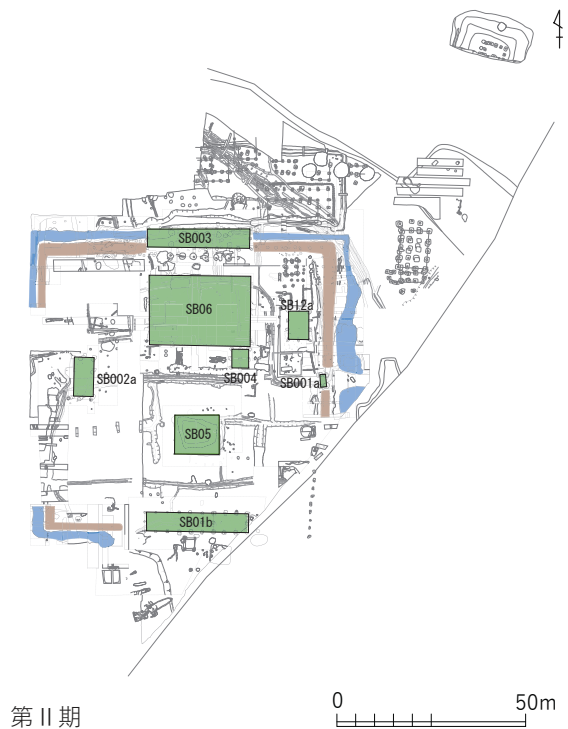
第 37 図 第Ⅰ期(創建期)の伽藍配置図

■第Ⅱ期

8世紀後半の中心伽藍の金堂と考えられる基壇建物跡 SB05 と講堂と考えられる掘込地業建物跡 SB06 を軸に、寺域内での建物が最も整備された時期(第Ⅱ期)から、9世紀前半頃に伽藍の一部が火災に遭った時期(第Ⅱ期終末)と考えています。

南門跡 SB01 と対称する位置に北側築地を取り壊し、僧房の可能性のある SB003 が建てられました。SB01 と SB003 の中心に東門跡 SB001 があり、第Ⅰ期よりも東側を意識した配置となっている可能性が指摘されています。SB06 の東側には SB12a が、SB06 南東に SB004 が、さらに西側中央部の SB001a と対称する位置に SB002a が配置されています。築地や区画溝は、北側は SB003 に取り付き、そのほかは第Ⅰ期そのままと考えられます。この時期に部分的に壊れた瓦を葺き替えており、Ⅰ期よりは范(瓦の木型)の傷が進んだ瓦を用いていました。

第Ⅱ期終末の9世紀前半頃に、SB003 が火災に遭い焼失します。その後、再建や改修工事のために作業場的な竪穴建物跡 SI03、SI04、SI05、SI07 などが寺域内外に建てられました。SB004 は柱を抜き取られ廃絶されています。



第Ⅱ期

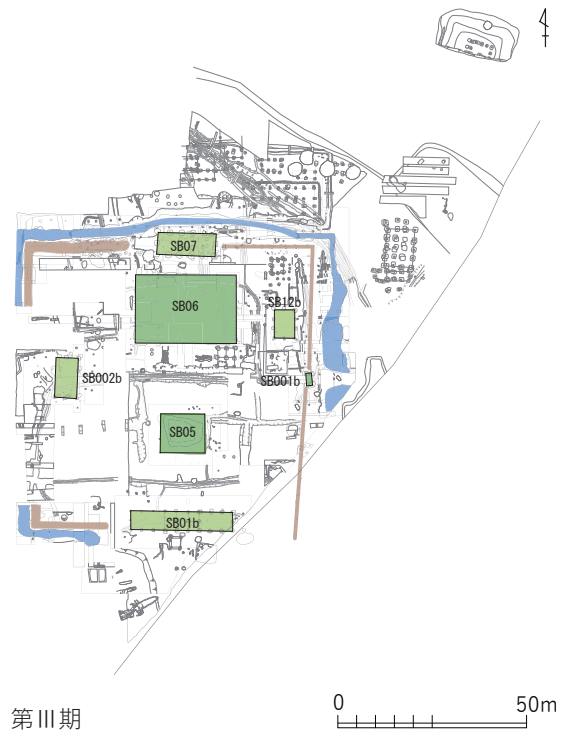


第Ⅱ期終末

第38図 第Ⅱ期の伽藍配置図

■第III期

9世紀中頃から後半頃の寺院伽藍の再建・改修した時期と考えられます。第II期終末に焼失したSB003に変わってSB07が建てられます。このSB07は主軸方位が東側に傾く建物跡で、これまでの真北方向とは大きく異なります。また、東辺と北東側の築地が崩壊し、柵列に改築されていました。さらに、SB07の建設にともなって北側を廻る区画溝(SD14)が建物を迂回するように付け替えられていました。そのほかの建物も部分的な建て替えが行われています(SB001b、SB002b、SB12b)。

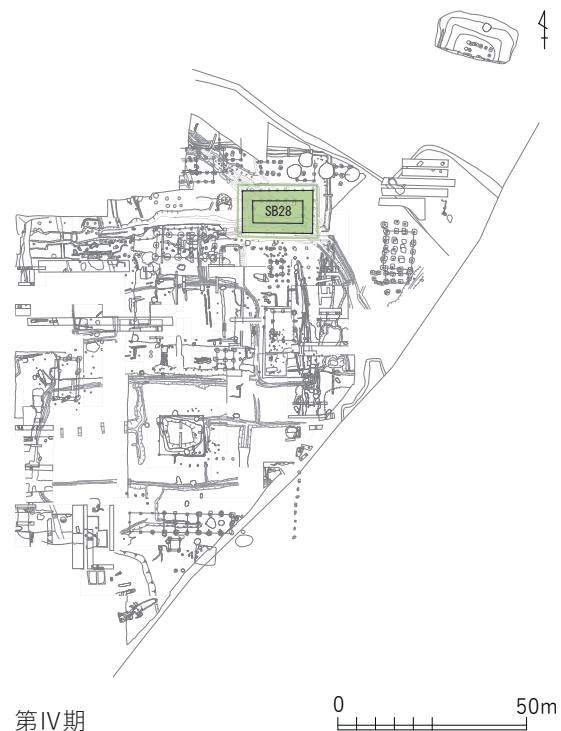


第III期

第39図 第III期の伽藍配置図

■第IV期

10世紀初めころの、寺院の衰退と終焉に向う時期と考えられます。これまで用いた中心伽藍が機能を失い、四面廂付建物跡SB28がこれまであった中心伽藍の北東側に作られました。これ以降、15世紀代まで本地での活動の痕跡が確認されていません。



第IV期

第40図 第IV期の伽藍配置図